
日差し

戸井田 康

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日差し

【Nコード】

N3151F

【作者名】

戸井田 康

【あらすじ】

病魔に犯された妻が肝臓癌で、余命三ヶ月と診断される。妻に告知したあと、二人で自宅療養していると公園で、日差し気持ちよう浴びる日がおおくなっていた。それが、人間から樹への進化のは始まりだった

Kは最近、体の調子が悪そうだった。

酷く体がだるく、何をするのにも億劫そうで、
塞ぎ込んでいる時間が多くなっていた。

医者に診てもらえと、僕は言い続けたが、Kは何か思うところがあるのか、

かたくなにそれを拒んでいた。

Kの顔色は日に日に悪くなっていく一方だった。

見かねた僕はKを車に押し込め、病院に担ぎ込んだ。

Kは即日、検査入院となった。

二週間ほどの検査の後、僕は一人、担当医の部屋に呼ばれた。

どの強い眼鏡をかけた神経質そうな医者と診察室の中、二人きりで
向かいあっていた。

彼は何度もこれまで、このような話をしてきたのだろう。

彼は手馴れた深刻そうな顔を僕に向けたまま、僕を見詰めた。

彼は、レントゲン写真を見せながら、重い口をゆっくりと開いた。
話を始めた。

結果は、末期の肝臓癌だった。それは手術が出来ないほど、Kの癌
は進行していた。

Kの命は、あともって三ヶ月だった。

僕はKに、この事実を告知するべきか、隠しておくべきか、悩んで
いた。

僕は彼女に真実を伝える事にした。彼女には、

K自身を苦しめ、命を奪うものの正体を知る権利がある。

「私から伝えますか」

医者は告知を決意した僕に尋ねた。

「いいえ、Kには私から伝えます。私の義務ですから」

僕はそう言つて、彼女の病室に向かった。

Kは眠っていた。Kの眠るベッドの横に置かれたスチール製の折り畳み椅子に腰掛け、

静かに眠るKの寝顔を見守った。綺麗な寝顔だった。

端整で小振りな顔が病気の為、更に小さくなっていた。

とても綺麗だった。僕はKを見守り続けた。

Kが目覚めた。

「おはよう」

僕はKに言った。

「おはようという、時間じゃないわね」

Kは何処を見ているのは分からない視線を漂わせていった。

「調子はどうだい」

僕はKの手をベッドの中で捜して握った。

僕は、Kの手を握り絞め続けた。

「なにかわたしに、話すことがあるんでしょ」

Kは、なにか企む子供の様な目をして僕にいった。

「実はね」

僕はKに事実を伝えた。

Kは僕の話静かに聞いていた。僕の予想道理に。

彼女は僕の話聞き終わると、僕が握っている手を握り返していった。

「私達の部屋に帰りたい」

僕は医者に相談した。

「あなたと、あなたの奥さんの望む方向でいいですよ」

彼はそういつて、自宅療養には、可能な限り協力を約束してくれた。僕とKは部屋に帰った。

僕は仕事を辞めた。Kの病気が癌であることが分かってから、殆んど出社していなかったが。

それは、古い友人と始めた仕事だった。二人きりで始めた仕事も、今では三十人程の所帯になっていた。

僕の古い友人は

「落ち着いたら、戻ってきたらいいさ」といつてくれた。

僕の古い友人は、きっと僕よりKを愛しているに違いなかった。僕の古い友人とKは、嘗て恋人同士だった。些細な行き違いと、勘違いで、二人は分かれ、Kは僕と結婚した。

「ありがとう。落ち着いたらそうさせてもらうよ」

僕は儀礼的にそういつて、僕の古い友人と別れた。

僕にはもうこの仕事に戻るつもりはなかった。

マンションに戻ったKは、とても調子が良さそうだった。このまま癌なんて、

に行ってしまうのではないか、僕は思った。

Kは病気のことなど忘れてしまったかのように、掃除、洗濯、料理に勤しんでいた。病気になる前には、そんなに好きではない作業だったのに。

僕はKに子供を生ませてやれなかった事を悔やんだ。Kと僕が望まなかったことだったが。

僕はKがいなくなった時の、喪失感を紛らわす為に、そんなことを考えていた。僕はKがいなくなった時の事を考えるのをやめようと思った。Kに今出来る事だけ考えようとした。

僕は色々な所にKを連れ出した。Kに思い出を沢山持たせてやりたかった。それは僕の思い出も増やす事でもあった。それでもいつの間にかKがいなくなった時の事を考えていた。僕は耐えられないと思った。

僕は一人街に出た。

酒を煽り、女を買った。二時間だけ部屋を借り、電話をかける。するとすぐに若い女が部屋に来た。女を連れてきた女衞に二万円を渡す。酒を飲みすぎたのか、体が言う事を利かなかった。女も協力してくれたが、結局、僕は女を抱けなかった。一時間経った。女は気の毒そうな顔をして迎えに来た女衞の車にのっていった。

マンションに戻った。Kは、まだ起きていたKは楽しそうに掃除をしていた。僕はすぐにKにいった

「だめだよ。こんな遅い時間までおきていちゃ」

「お帰りなさい」

Kは笑って僕にいった。どこで何をしていたのか尋ねてこなかった。僕はKにもう一度いった。

「ただいま。君のところに戻ってきたよ」

Kが僕に向って満面の笑みを浮かべた。僕も、同じくらいの笑顔で返した。

僕はKを胸に抱いた。Kの痩せた小さくなった体を抱いた時、僕自身が大きくなった僕のそれが、Kの内腿に触れた。

Kはそれに手を伸ばし、大きさを確認すると、しゃがんで、それを引き出した。

「堅くなつたのね。あなたの存在理由が」

僕は困ったような、照れくさいような、鼻の頭が痒いような顔をして、Kの顔を見下ろした。

そんな僕の顔を満足そうに見上げると、Kは、僕のを口に含んだ。Kは僕のそれを舌の上で転がして、軽く歯を当てながら強く吸った。僕は声を出し、Kの頭を両手で支えた。

僕はすぐに口の中で果てた。

Kは満足そうにまだ大きさを保っているそれを大事そうに、そつと口の中から出した。満足そうにそれを見詰め、口の中の液体を飲み込んだ。

僕はKにキスをした。いつもより、深いキスを。

Kの病状が急激に悪化したのはそれからきっかり一週間たった夜だった。その日は医者からの宣告から一ヶ月過ぎていた。

Kは再び入院した。

一日の間、ほんお少しだけ戻る意識の中、Kは僕にいった。

「延命処置なんていらなかならね」

僕は、頷くしかなかった。そしてKはいった。

「あの部屋に戻りたい」

二週間後、Kは部屋に帰ってきた。

一番見晴しのいい場所にKのベッドを置いた。

Kは意識がある間、そこから外の景色を見ていた。そこから、この街の中心にある、一番大きな公園が見えた。平凡な名前がつけられている、何処の町にでもある様な名前だ。その名は中央公園。僕達のマンションはその中央公園と、この街で一番太い幹線道路の向かいに建っている。

そのマンションの十五階が僕達の部屋だ。三十階建てのマンションの真中、中央公園の様子が良く見えた。

「私達の庭みたいね」

Kはそういつて喜んでいた。

今、Kは一日中、その庭を見下ろしながら眠っている。

僕はそんなKの寝顔を見ながら、一日を過ごした。

気持ちの良い、やわらかな日差しが、中央公園の良く見える南向きの窓から入り込んできた。

今日も気持ちの良い、やわらかな日差しだった。

今日もKの寝顔を見ていた。医者の宣告の二ヶ月が過ぎようとしていた。宣告からKの病状には、素人見ながら、変化は見られなかった。僕はほんの少しだけの淡い期待を持った。このままの状態が、ずっと続くのではないかと。

いつの間にか、眠ってしまった。気が付くとKのベッドの隅に頭を乗せて眠っていた。

僕は体を半分起こして、Kの横顔を見ようとした。Kはそこにいなかった。

その途端、僕の目は完全に覚めた。僕はマンションの中を探し回った。

何処を探しても建物の中には、Kの姿は無かった。Kはそこにいた。

Kは、日差しの中で、佇んでいた。

光を体中に浴びて、佇んでいた。

Kは、両手を空に向かって上げていた。手の平を大きく広げ、少しでも多く、太陽の光を浴びようとしているようだった。

僕はKの隣に立った。Kの目が少し開いて僕の方をみた。僕もKの目を覗きこんだ。

Kに向かっていった。

「さあ、帰ろうか」

「もう少し、こうしていたい」

Kはそういつて、また目を閉じた。

僕はKの隣に座った。僕も目を閉じ、光を浴びた。

陽が暮れた。陽が沈むとKは僕の手を取った。僕は手を握り、Kをマンションに連れて帰った。

Kはマンションの十五階から暗闇に沈む公園を見下ろしていた。

「体に障るよ。もう休もう」

Kは頷いて、ベッドに戻った。

それからKは、中央公園で陽を浴びる日が多くなった。

陽を浴びているKは、とても幸福そうだった。僕もそんなKを見ていると、とても幸福な気持ちになった。

Kは目を閉じ、両手を上げて、体中に陽を浴びていた。

K隣で僕はKを見守っていた。そんな日が続いていた。

医者に宣告された三ヶ月が近付いていた。僕の淡かった期待は、もう少しだけ、ほんの一寸、大きくなった。

Kと僕の日向ぼっこは続いた。

温暖化のせい、冬になっても日差しは心地よかった。厚着をしたKと僕は毎日中央公園で佇んだ。

気が付くと、日差しの中にいる僕達の周りにも、日差しの中で佇む人々がいた。彼らはKと同じように日差しの中で両手を上げて、陽の光を浴びていた。

日毎、彼等の姿が少しずつ増えていった。いつの日か、僕達の公園は、日差しを浴びる人たちで一杯になった。

沢山の仲間が出来たような感じだった。

毎日、朝早く、僕はKを連れて公園に行った。どんなに朝早く行っても、中央公園は人で一杯だった。

不思議といつもの僕達が佇む場所は、予約された指定席のようにそこだけ、ポカンと空いていた。

僕は何時もの場所で陽を浴びるKを見守っていた。

心なしか、Kの、肌の色が薄く緑色に染まって様な気がした。

毎日、あの場所でKを見守り続けた。それは、気のせいではなかった。

日に日に、Kの色が濃くなっていった。肌の色だけではなく、髪が白くなっていった。白髪ではなく、銀髪だった。

樹が生えていた。大きな樹だった。

朝、何時ものように、Kを伴って、中央公園に行った。

何時もの中央公園は、いつのものそれでなかった。

樹が繁っていた。

樹には、太い枝が四本生えていた。根元から三分の一くらいの所に四十五度の角度で二本、先端部分にこれも四十五度の角度で二本、その枝の先に大きな葉が一枚ずつ、計四枚、ついていた。

中央公園は、それら樹が生茂る森になっていた。

公園だけではなかった、街のあらゆる所に、同じような樹が繁っていた。中が森に変わっていた。

僕達は、巨大な森の中にいた。

樹は、直径一メートル、高さ十五メートル、この街のあらゆる場所から生えていた。

街から人の姿が消えていた。

車や人で溢れていた街は、今では、それらの変わりに、大きな樹がいたるところに生繁っていた。

樹は生長していた。

中央公園に密集して生えていた樹木が、同化し巨大な樹が更に大き

くなっていた。樹と樹が混じり合い、入り乱れて、一つになり、更に巨大になって公園を埋めし、街を覆いつくそうとしていた。

中央公園の樹は直径三百メートル、高さ、二百メートルを越え、この街最大の高さと、大きさを誇っていた。それは、この世界の新しい支配者であるかのように、この街を見下ろしていた。

この街は樹の濃い緑色の葉に覆われた。Kはすぐにでも、それらの仲間になりたいような素振りで、うつとりとその様子を見詰めていた。

樹が唸り始めた。それはKを呼んでいた。

Kの髪の色が、銀色に光出した。それが光り輝き、逆立ち、伸び始めた。それと同時にKの肌が更に濃い緑色に染まり、手の平と足の甲が平たく、大きくなっていった。

僕はKの緑色に染まった腕を取り、そこから離れようとした。Kは離れるのを当然のように嫌がった。

僕はKを脇に抱え、走りだした。マンションのガレージに向かった。Kは樹になりかけていた。

僕はKをロードスターに乗せた。もう、乗せるというより、積んだといった方が正しい状況だった。

車を思い切り走らせた。まだ、何とか、車一台くらい、通れるほどの隙間が残っていた。ドアを擦り、ぶつけながら、僕は車を走らせた。十メートル以上伸びた銀色のKの髪が風に靡いた。途中、何台もの車が樹にめり込んでいた。その内何台かが炎上したのか、樹の表皮を茶色く焦がしていた。

僕の車は何か、かつて街だった森を抜けた。森を抜けて、いたるところに、あの樹が生茂っていた。まだ郊外は街に比べると、密度は薄かった。

Kは僕の車の中で、緑を濃くしていた。僕は郊外を抜け、県境を越えた。小高い丘の上に建つ、父親の別荘に着いた。そこから、街の様子が良く見えた。

あらゆる場所、あらゆる所にあの樹がたっていた。動いている車、

どころか、人間の姿も見えなかった、風に揺れる樹とそれに侵食されていく街以外、何も動く物はなかった。

よく晴れたいい日だった。

父の別荘には広い庭があった。

Kはすでに動かなくなっていた。

その庭に動かなくなったKを降ろした。

Kは庭の中心にその身を置いた。

銀色の根が動き出した。

長く伸び、白銀と化した根が、庭の地面をのたうっていた。

銀色の根は庭一杯に広がり、建物の中にも入り込みだした。Kの隣に佇む僕の体も覆い始めた。僕はそのままKの体の一部になりたかった。僕の視界は銀色で覆われた。

がさがさと、大きな音をたてて、銀色の根がざわめいていた。

僕の視界が一瞬で明るくなった。

銀色の根は一齐に、覆った庭の土の中に潜り込もうとしていた。

僕はKのところに駆け寄ろうとしたが、根がざわめいて邪魔をした。そのざわめく銀色の髪に引かれるように、Kの頭が庭の中心に近付いていった。

Kの頭が庭の土に辿りついた、Kの顔が僕の方を向き始めた。Kの頭が百八十度回転して、は顔を僕の方に向いた。

Kは僕の方を見て、優しく微笑んだ。

僕も、小さく笑った。

Kの顔は微笑みながら、土の中に減り込んでいった。

額、瞳、鼻、口を残してKの土の中への沈没は止まった。銀色の根も総てが地中へと姿を消した。

Kの体から伸びた葉が四つ、大きく空に広がり、風に揺れていた。

僕は、嘗て、そして今でもKに違いないその樹を抱き締めた。

頬を寄せて目を閉じると、彼女の声が直接

頭の中に響いてきた。

彼女は何時もの、彼女だった。

わたしは 樹になったのよ

もう、病気の苦しさも、かなしみも、さみしさも、何一つ、苦痛はなくなったのよ。

だって、わたしは樹になったのですもの

樹になったわたしたちにはもう、孤独など存在しないの。わたしは、すべてであり、すべてはわたし。個と個の区別は無くなったのよ。わたしは、総てのわたし達と同一なの。

恐竜が鳥に進化したように、わたし達は、樹に進化したの。

樹になった私達をみて、今までのように、もう、他の命を犠牲にしないで、自分の命を保つことが出来るのよ。

そして、永遠に近い時間の中で、宇宙と対話をするのよ。

樹に進化して、一つの意識体になったわたしたちは、宇宙の意識を語り合うの。そしてわたしたちは宇宙の本質を観察するのよ。

宇宙は私達にその本質を観察されて、初めて、その存在が確定するの。

この星の進化は宇宙の意思なの。

宇宙は樹になったわたしたちに観察されたがっているの。

嘗てKだった樹は、僕の頭の中に直接、そのイメージを送り込んだ。そして、誇らしげに枝を鳴らした。

僕はその壮大なイメージに圧倒された。それは遥、百億光年の彼方に存在する、宇宙意識そのものの、映像だった。

僕はそれの優しさと、安らぎ、そして、それはKそのものだった。

僕は、いつ、君のように、その素晴らしい樹になれるんだい。

僕は嘗てKだった樹を抱き締めながら尋ねた。

うつん、あなたは樹になれないの。だってあなたは这个世界最後の人間だから。

あなたはいままでの人間の業を背負って残りの時間を一人きりで過ごさなければならぬの。

あなたが悪いわけではないの。

あなたは偶然に選ばれてしまっただけ。あなたは死んでも永遠に人間であり続けるの。

さようなら、あなた

さようなら、最後の人

Kは僕の意識から消えた。

僕はKを呼んだ。

何度も、何度も、何度も

いつまでも、呼び続けた。

いつまでも、Kを呼び続け、

僕はいつの間にか、泣いていた。

何故、僕だけ、取り残されるのか。

何故、僕だけ、永遠の孤独の中でたた打ち回らなければならないのか。

何故、僕なのか。

叫び続け、泣き続けた僕は

かつてKたった樹の根もとに越を降ろした。

嘗て、Kだった樹を見あげた。

もう、Kは何一つ応えてはくれなかった。

僕は永遠の孤独の中でいた。

いつか、死んだ時、僕の体が腐り崩れて域、

Kの養分となって吸収されるのを夢見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3151f/>

日差し

2010年10月11日03時44分発行